

キウイとマーフィー

伏田めぐみ

キウイが死んだとき、マーフィーは教室にいた。

先生は陰気な声で言った。

「残念ですが、キウイは死にました」

子供たちは静まり返って、先生の顔を見つめた。

時計の針が止まる。

たった一人、そこを飛び出していったのはマーフィーだった。

マーフィーには確信があった。

きっとキウイは、砂丘で死んだに違いない。

キウイはいい子だった。

マーフィーは悪い子だった。

マーフィーが悪いことをして先生に叱られていると、キウイは必ずそこにやってきた。

すると先生はマーフィーに、お決まりの台詞を言う。

「あなたは幼稚園児以下だ」  
キウイはマーフィーにちらりと目を遣る。  
マーフィーはその度に思うのだった。  
大嫌い。

夕暮れの廊下に、歪な音が響いている。

白い手が、マーフィーの頭を壁に打ち付けていた。

マーフィーは音もなく床に崩れた。

「なにその目。人の恋人取ったくせに」

彼女はマーフィーを見下ろして、去っていく。

マーフィーは頭を押さえながら、壁伝いに保健室へと向かった。

保健室でシャツをめくると、二の腕まで真っ青になっていた。

「誰かに迎えに来てもらいなさい」

保健室の先生は言う。

マーフィーはふと、キウイを呼ぼうと思った。

『迎えに来て』

電話に出たキウイは、どうして、と聞く。

マーフィーは答えない。

まもなくキウイはやってきて、包帯を巻いたマーフィーを見てぎょっとした。

「後で病院行ってね」

保健室の先生は手を振って二人を見送った。

キウイはマーフィーに寄り添って歩く。

「誰にやられたの」

「あの人」

「どうして」

マーフィーは首を振る。

頭をぐらぐらさせながら。

駅までの間、二人はずっとうつむいていた。

改札の手前になって、キウイは言った。

「送るよ」

「うん」

「途中で死なれても困るし」

「遠いよ？」

「別にいい」

電車の中でも、マーフィーは始終うつむいていた。

キウイは重たげな本を開いて、勉強している。

マーフィーは時折、キウイの視線を感じた。

一駅ごとに乗客が減っていく。

とうとう二人だけになると、マーフィーはキウイの肩に頭を載せてみた。

キウイは何も言わなかった。

「家、来る？」

「親がいるでしょ」

「いないよ」

マーフィーは笑った。

「死んだんだ」

マンションのロビーで、キウイは初めてマーフィーに触れた。突然、マーフィーは手首を掴まれ、大きな黒い目に覗きこまれた。

キウイの力は強くて、マーフィーは掴まれたまま、どうすることもできなかった。ちよっとすると、キウイは手を離して、

「怖かった？」

と言った。

「うん」

マーフィーは目を伏せた。

### 3

帰り道、橙色の街灯の下にキウイが立っていた。

「ほんとに待っていてくれたんだ」

マーフィーはにっこり笑う。

「一緒に帰ろうって言ったのそっちでしょ」

キウイは素っ気なく言うと、歩き出す。

「うん」

マーフィーは嬉しそうに、その後が続いた。

二人は畑に沿って歩いていった。

キウイはうっすらと開いた口から、白い息を吐いている。

霽の中は寒い。

マーフィーはコートを着てこなかったことを後悔した。

「寒い……」

と呟く声。

キウイは立ち止まって、空を仰いだ。

そして、くると振り返ると、自分のマフラーを差し出した。

しばらく行くと、沼にたどり着いた。

ピンク色、エメラルドグリーン、紺色、いろいろな色の石が転がっている。

マーフィーはその一つを拾い上げて、キウイに手渡した。

キウイはそれを受け取ると、高く放った。

石は曇った空に放物線を描いて、水の中に消えていく。

「花のやうに  
愛もまこともしほれやすいものなら」  
「なにそれ」  
「父さんが死ぬ少し前、二人で鎌倉に行ったんだ。そのとき見つけた言葉」  
「ふうん」  
キウイはまた、灰色の沼に石を投げた。  
ほちゃん、というたわんだ音。  
「続きは？」  
マーフィーは首を振る。  
「覚えてない」

4

放課後の教室には、キウイと、キウイの友達の影響が伸びていた。  
二人は机を挟んで向かい合っている。  
「あの子のことを調べた。過去に、親しい友人が何人か自殺してる」  
キウイの友達の、潜められた声。

「これ以上あの子に関わらないほうがいい」  
キウイは何も言わず、友達を見据える。  
廊下で、教室のドアに指を掛けたままうつむいているのはマーフィーだった。  
「そうか」  
キウイの虚ろな声。  
マーフィーの指先は、ドアからゆっくり離れていった。

マーフィーがいなくなってから、数日が過ぎた。  
ある人は河川敷で、白いふわふわのものを見たという。  
「なんだか、いてはいけないものがそこにいた気がして、怖かったの」  
キウイが半信半疑でそこへ行くと、川沿いを歩くマーフィーがいた。  
マーフィーはぼうつとキウイを見た。  
そして、何事もなかったかのように視線を前に戻した。  
「マーフィー」  
キウイはマーフィーのほうに一步、歩み寄る。  
もう一步。

すると、

「キウイはクリスマス、どうするの」

マーフィーがほつりと言った。

キウイは立ち止まる。

そのまま何も言わずにいると、マーフィーはキウイに背を向けた。

キウイはその腕を取って、マーフィーの顔を自分に向けさせた。

「君は僕を殺したい?」

マーフィーはしばらく考えてから、こくりと頷く。

キウイはマーフィーの両肩に手を置いて言った。

「じゃあいいことを教えてあげる。僕はね、ここにいなきゃ嫌だって言われたら、次の日死ねるんだよ」

二人はくすくす笑いあった。

キウイはマーフィーの手を引いて、来た道を引き返していく。

マーフィーはときどきキウイを追い越して、その手を引っ張って歩いた。

「風が強いね」

「そうだね」

「飛んじゃいそう」

「君が?」

「違うよ、あそこの看板」

マーフィーは遠くの古ぼけた看板を指差す。

看板は乾いた音を立てて揺れている。

「飛んだらどうする?」

「どうしようもないでしょ」

「こっちに来たら、避けられるかなあ」

「さあ」

キウイは黙々と歩いている。

マーフィーはキウイの隣に並んだ。

「キウイが盾になってくれるんでしょ」

「言うと思った」

キウイは小さく溜め息。

その顔を、マーフィーが覗き込む。

「なに」

「キウイ、笑ってる」

「笑ってないよ」

「笑ってたよ。嘘つき」

二人の足取りは軽い。

街角に立った大きなキャンドルは、もう半分以上溶けていた。

「クリスマス、どっか行くの」

「うん」

「じゃあなんで僕の予定聞いたの」

「キウイが空いてるって言えば、断ろうと思ってた」

我が儘なマーフィー。

キウイはマーフィーをまじまじと見る。

「映画、観たいのあるんだけど」

少し間を置いて、

「イヴ空いてますか」

それを聞くと、マーフィーは口に両手を当てて、飛んだり跳ねたりした。

「キウイ、キウイ」

「なに」

マーフィーはキウイの服の裾を引っ張る。

「キウイは優しいね」

幸せそうに笑っていた。

「僕は優しいよ」

## 5

キウイはマーフィーを音楽室へ連れて帰った。

小さな箱の中に広がっている世界。

それがマーフィーのすべてだった。

そこには絶えずピアノの音が流れていた。

深爪気味の指先が、鍵盤を叩く。

マーフィーは床に座り込んで、ピアノの脚に背中をもたせかける。

そして、キウイを見上げる。

マーフィーはもう何もできなくなる。

「どこか遠い世界に行けたらいいのに。  
僕たち以外誰もいないところ。  
何の音もなくて、どこまでも白い砂が続いてるの」

いつかマーフィーがここからいなくなるときがくるなら、それはキウイがこの世界を壊すときだと、マーフィーは思っていた。

## 6

短くなったキャンドルが最後の蠟を溶かす前に、雪が降り始めた。  
マーフィーはキウイのマフラーに顔を埋める。

「私と観るって言ったのに」

そう言って彼女は泣き出した。

「ごめん」

キウイは頭垂れて、彼女を促す。

「少し話そう」

すると彼女はマーフィーに向き直り、微笑んだ。

「あなたは気にしなくていいのよ」

マーフィーは二人の後を、一定の距離を保って歩いた。

二人はときどきマーフィーを振り返って、優しく手招きする。

駅前の十字路で、彼女はいなくなった。

マーフィーはキウイに追いついて言った。

「三人で観に行けばよかったのに」

「断られた」

キウイは泣いていた。

「彼女とは、ちゃんと約束してた訳じゃないんだ」

「どうして泣いているの」

「僕はもう泣いたらいい」

マーフィーはキウイの手を引いて、喫茶店に入った。

テーブルの上には砂時計が置かれている。

それから、紅茶、モンブラン、銀のフォーク。

マーフィーがケーキを食べ終わるころ、キウイは泣きやんだ。



二人の周りに客はいなかった。  
いつの間にか店員の姿も消えていた。

キウイはフォークを置くと、苦笑いを浮かべた。

「君にマフラーを貸すと、ベビードールが残るね」

「わかった？」

マーフィーは悪戯っぽく言う。

「わかるよ」

押さえられた低い声が囁く。

「三年間、ずっと同じ香水だった」

キウイはマーフィーの首筋を見た。

そして、長い息を吐くと、テーブルの上で手を組んだ。

「君のことを友達とは思えない」

マーフィーはきよんとする。

「僕らの関係はいったいなんなんだろう」

キウイの問いに、マーフィーは答えられない。

ただ首を傾けて、とろんとした目でキウイを見ていた。

「名前が付けられないんだ」

キウイは困ったように言う。

するとマーフィーも一緒に困った顔をした。

それを見て、キウイは口元を綻ばせる。

「奢るよ」

帰り際、キウイはいつになく真剣な口調で言った。

「ギリギリまで一緒に来て」

マーフィーは、こくと頷く。

そして、キウイの後ろをちょこちょこ付いていった。

## 7

海辺に出た。

水に浮かぶ魚の背は、月に照らされて青光りしている。

二人は小さな舟に乗りこんで、暗い海の中をどこまでも進んでいった。

「青潮だね」

キウイが呟く。

水面を覗き込むと、確かにそれは鏡のように青白かった。アオミドロの中でたくさん魚が呼吸している。

「ここを過ぎれば、夜光虫が見える」

言葉が終わらないうちに、たくさんの光の粉が浮かんできた。

浮かんでは消え、消えては浮かぶそれは万華鏡みたいだ。

しばらくすると、岸が見えた。

キウイはそれを指差して言う。

「あれは砂丘だよ」

マーフィーは砂丘がどういうものなのか知らなかったから、その言葉に頷くことができなかつた。

でも、キウイが言うならきつとそうなのだろう、とマーフィーは思った。

波打ち際に、小さな家があった。

二人はそこへ入った。

家の中には、小さなベッドとテーブル。

テーブルの上に砂時計が置かれている。

キウイはランプの灯を点した。

家の中が、オレンジ色の光で満ちる。

マーフィーはベッドに横たわった。

「眠れないの。父さんが死んだ日からずっと」

「あの日は寝ていたよ」

「あなたが傍にいたから」

揺れる灯が、キウイの顔を照らす。

マーフィーは不安そうにその目を見つめた。

「キウイは眠らないの？」

キウイはテーブルに肘をつきながら、微笑む。

「僕はここで祈っているよ。君がよく眠れるように」

朝、目を覚ますとキウイはいなかった。

マーフィーは受話器を取った。

『迎えに来て』

すると、受話器の向こうで笑う気配がした。

海はもうなくなっていた。

かつて海だった場所には、真っ白な砂が広がっている。  
舐めてみると、それは砂ではなくて塩だった。  
足の裏で踏み付けるたびに、おびただしい数の結晶が壊れる音がする。  
これが砂丘っていうんだ。  
「嘘つき」

8

子供がピオトープの中で、小さな生き物を見つけた。  
その生き物、白くてふわふわしたものは、うずくまって下を向いている。  
「何してるの」  
子供の声に、生き物は顔を上げた。  
その腕の中には、一羽の茶色い鳥が眠っていた。  
「お墓を作るの」  
生き物は黒い瞳を瞬かせる。  
子供はじっと、生き物を見つめる。  
そして、

「シャベル、いる?」  
銀色のシャベルを手渡した。  
「ありがとう」  
生き物は鳥を傍らに置くと、湿った土にシャベルをあてがう。  
子供はしゃがんで、生き物のぎこちない手付きを眺めた。  
「君、名前は?」  
「マーフィー」  
「マーフィー、代わるよ」  
子供の手付きはマーフィーよりずっとしっかりしていた。  
ほどなく鳥は土の中に埋まった。  
マーフィーは泣いていた。  
「泣いてるの、鳥のため?」  
「うん」  
「なんていう名前だったの」  
「知らない」  
「君のじゃないの」  
「さっき見つけたの」

「そう」  
子供は立ち上がって、マーフィーに手を差し出す。  
「行こう」  
マーフィーはその手を取った。  
二人は並んで歩き出した。  
鐘が鳴る。  
ビオトープが閉まる時間だ。  
マーフィーは子供に悟られないように、そっと振り返った。  
「おやすみ」

アーサー王研究会創作文庫  
キウイとマーフィー  
著者 伏田めぐみ

2013年 1月 9日 発行  
発行人 不破有理  
発行所 慶應義塾大学 アーサー王研究会  
〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1  
慶應義塾大学来往舎1階 代表 045-563-1151



